

## 「いつわりの快」について：プラトン『ピレボス』 研究序説

新島，龍美

<https://doi.org/10.15017/1397692>

---

出版情報：哲学論文集．21，pp.43-64，1985-09-20．九州大学哲学会  
バージョン：  
権利関係：



# 「いつわりの快」について

——プラトン『ピレボス』研究序説——

新 島 龍 美

「いつわりの快」について

「XはXである」は、その形式の故に、Xに何を代入しようとも恒に真であり、同一律と呼ばれる。しかしそれが一旦Xに具体的な名が代入され我々の生きた言語使用の連関のなかで働く時、そこには様々なニュアンスが含まれる。しかもそれは、場合によっては単なる言葉のあやではなく、そこで主題として語られているものに對する、それを用いる者の把握の仕方を暗示する。そのものについてそれ以上問題にすることはできない、或いはその必要はない、との意をこめて用いられるからでもあるか。我々にとって「善き生」とは何か、を問うプラトンの後期對話篇『ピレボス』において「快樂こそが善である」と主張する對話人物ピレボス、及びその説を引き継ぎ語るプロタルコス、ある仕方で「快は快だ」と言いたくなっている様に思われる。では、それはどのような仕方か。それは、A、快はそれがいかなるものから(από)であろうと、たとえ反対のものからであろうと、「快である」という点では一つである(快の一性)、B、当人にとって快いと思われるならば、それは快である、すなわち「快いと思われる」ことが「快くある」ことである(現われ・思われある)の二つに要

約して述べる事ができる様に思われる。小論は、『ピレボス』後半で語られる「いつわりの快」の考察——それは通常、いつわりの快の考察(i)三六C—四一B、同(ii)四一B—四二C、同(iii)四二C—五〇Eの三つの部分に分けられる——（及び真なる快の考察）を中心に、右の様な快の把握に対してプラトンがどのように考えようとしたかを示し、また同時に、通常は各各別箇の議論として扱えられがちな三つの部分がある一連のつながりの下で理解され得ることを仄示しようとする試みの序論にあたるものである。

## I

いつわりの快への直接の言及の前に対話人物ソクラテスは、三一B—三二B及び三二C—三六Cにおいて異なつた種類（？）の快を提示する。我々は先ずそれらを見なければならぬ。それは、一方ではいつわりの快の考察がいかなる文脈の中で提示されたものであるのかを見究める為であり、他方では快樂というものについてのプロタルコス流の把握（A、B）がいかなる所にいわばその淵源を有するのかを見る為である。

Iの1 先の箇所（三一B—三二B）において、快は次の様な仕方ですら語られる。一方空腹は苦痛であるが、それは動物の自然本来の在り方の解体と解される。他方この様な状態での食物摂取は快であるが、そこでは充足が生じている、とされる。（渴き等についても同様に語られる。）「われわれ動物のうちで調和が破れる時、その時に自然の在り方（*physis*）の解体と苦痛の生起が生じる。……しかしふたたび調和がととのえられ、それ自身の自然の在り方にもどるとき、快（*hêdonê*）が生じる。」（三一D）

この様な場面での快は、苦という崩壊の状態にあるものの、それ自身の自然本来の在り方への回復の過程（*odôc*:32 A 8, B 3）として、「欠如—充足」といういわば自然学的図式の中でとらえられている。（それ故、ここでは快は、欠如・崩壊

## 「いつもの快」について

「苦」の存在を前提にしており、また、苦が止むとき快もまた止むことになろう。」

この把握は後に（四三B以下）少しく修正される。<sup>(3)</sup> 生命あるものはそれがうけとる（被る *παύειν*）全てのものを感覚するわけではないからして、上へでも下へでも変化（「過程」が生じさえすればそれは快苦を結果として産み出す *ἀνεργαζόντων*）わけではなく「大きな変化は我々に快苦をつくり出す（*τείνειν*）が、微少でおたやかな変化は全く何もつくり出さない。」（四三C）とされるが、そこで生じる快の構造自身は前の箇所と同じ様に考えられていると思われる。

では、その構造はいかなるものか。以上のことからそれは次の様に言えよう。この様ないわば身体的な快に於いては、例えばのどが渴いて水をのむ際、その水によって乾きの充足過程が生じ、そこに快の感覚が生じる（この場合の感覚は、充足のつまり充足としての感覚であるわけではない）、或いは、そこで生じる過程・変化の結果生じる何らかのパトス（*πάθος*）が快である、と。ここでは、快は何らかの結果として在る。つまり、ここでは「快い」とされるものと快との関係は因果的な関係であり、両者の間には論理的な必然性は存しない。それは「何かの」快なのではない。それ故ここでは、快を感じている時、何がその快を惹き起こしたかについて誤り得ることになる。更に、例えば水をのんで快を感じるとき、水は大抵の場合、渴きをいやし快を惹き起こしたかについて誤り得ることになる。更に、例えば水をのんで快を感じるとき、水は渴きの理由で、水をのんでも充足が生じない、或いは快が生じない場合を考えることは容易であらう。逆にまた、渴きは、水以外の様々なものによってもいやされ得、そこに快が生じ得る。そこには、何らかの対一の対応関係も成立してはいない。この様に考えてくる時、先に述べたプロタルコス流の快の把握の地盤はこの様な身体的な快の場面に在る様に思われる。そこでは、快は、一方、諸々のものによって惹き起こされる何か或るものとして、仮えそれを惹き起こしその原因となるものがいかに異なるものであらうと、快である限りに於いて一つであり（冒頭A）、他方、何らかの内的なパトス、それをうけとる（*παύειν*）当人だけが理解可能とされるパトスとして、その人にそう現われた場合にそしてその場合にのみそう在りするという在り方（同B）をするものとされているのである。

では、プロタルコス流の把握（A、Bを柱とする）は快の把握として正しいのであろうか。そのことが言える為には少くとも、いかなる快であれ、それはA及びBの在り方をする、ということが主張できる、という条件の成立が必要である。だが、対話人物ソクラテスは、ここで、以上の様な身体的な快とは異なる（とされる）快について語り始める。

Iの2 三二C以後でソクラテスが語る快の場面は、次の様に略述できよう。即ち、ひとは水をのんで快を感じるだけではなく、のどがかわいて水をのむことを欲する場合、実際には未だ水をのんではないが、水がのめそうだと思ふ場合には期待して喜ぶ。

プラトンによれば、この場合の快（喜び）は「ところ（*χώρα*）それ自身に属し、それらの情態変化（『身体的な快苦』）に先立って予期されたことに則してのものであって、一方快いものに先立って期待されるものは快く、こころいさむものがあるが、他方苦しいものに先立つものは恐ろしく、苦痛を与えるものである」（三二B—C）と語られる快に属するものとして、先の身体的な快とは異なる部類とされる。では、その相違の内実は如何なるものであるのか。我々は先ずテキストを見てゆくことにしよう。

期待（*ἐκδοχή*）としての快の考察は先ず欲求（*ἐπιθυμία*）の考察（三四D—三五D）で始まる。一方「渴いている」という動詞は「空っぽである」というと同義である。他方渴きは飲物による充足への欲求である。それ故、のどがかわいて（水をのむことを欲して）いる者は、彼の今ある状態とは反対のものを欲求していることになる。欲求は何かの（何かへの）欲求である以上、渴いている人の何かが（今現にない）充足に触れることができるとしなければならぬ。しかるに、身体にはそれは不可能である。（身体は空の状態にある故）従って残る可能性は「こころが充足に触れている」ということだけであり、それは明らかに「記憶によって *ἐν νουμένῳ*」（三五C一）である、とされる。今現にある状態とは反対の状態に触れることができるのは、その反対のもの（この場合には充足）をかつて経験しその記憶を保持しているからに他ならない、というのである。こうして先ず欲求が身体にではなくこころに属することが示される。次いで、この様な欠如如苦の状態にあってその充足

を欲求している場合が更に二つに分けられる。一方、現に空の状態にあって苦を感じてはいるがその欠如（『苦』）の充足の明らかな期待のうちにある場合には、「記憶していることによって、充足されるであろうということを期待して喜ぶ」（三六B）が、他方そのような期待を持ってない場合には、苦痛はいまある身体の渇きによるものに失望としての苦が加わって二重になる。<sup>(5)</sup>

快の二つめの部類とされた期待としての快は、その考察の冒頭（三二B—C）で同意された如く、「身体とは離れてこそそれ自身に属する快」として、先の身体的な快とは異なることが、以上の様な語り方でもって、ひとまず語られる。

だが、以上の様な仕方では、即ち「身体——ところ」の二分法に則して二つの快の相違を語ることは、先にあげたA、B二つの主張を柱とするプロタルコス流の快把握に対して、その把握の源とも言える身体的な快の在り方とはその構造に於いて異なる快の在ることを、その構造をそれとして明示的に示すことによって語ることを通して、プロタルコス流の快把握が快樂一般の理解として成立しないことを、果してどこまで構造的に語り得ているのであろうか。

Iの3 従来多くの注目を集め、しかも（或いはそれ故に？）いくつもの異なる解釈がなされてきた、問題の「いつわりの快」の存在をめぐる問い（三六C六—七）が提起されるのは、正にこの地点に於いてである。この問いは、以上の様な期待としての快の考察を「次の点で用いる（適用する）ことにしよう。」というソクラテスの言明（三六C三—四）によって導入され、しかもプロタルコスによって即座に否定される。「だが、どうしてソクラテス、快や苦が偽であることがあり得まじょうか。」（三六C八—九）ソクラテスが、これまでの期待としての快の考察から当然出てくることとして展開しようとした「偽なる快」の存在が、期待としての快がこころ自身に属する快としてその身体的な快とは異なるものであることに同意した苦のプロタルコスによって言下で否定された、というこの間の状況は何を示しているものであろうか。それは、「身体を離れて、こころそれ自身に属する快」の存在への両人の同意（三二B—C）は、そのようなものとしての期待としての快がその構造においていかなる在り方を有するか、についての同意を含むものではなかったことを仄示してはいないであらうか、つまり、プ

ロタルコスにとっては身体的な快と期待としての快の相違は本当の所は把握られてはいなかったのではないか。或いは、前に前者を身体に後者をところに配することだけでは未だそれら二つの（とされている）快の相違は真実の所明らかになつてはいないことを——或いは更に言えば、期待としての快をも「因果的關係——パトスとしての快」の枠組の中で理解することの誤りであることをそれとして明示するには到っていないことを——プラトンはここで暗示しようとしていると解し得るのではないか。<sup>(6)</sup>そして実際、以下四一Bまでの、いつわりの快の考察(1)は、期待するとはいかなることであり、そこでの快はいかなる構造を持つのか、を改めて問い直す形でなされるのである。「いつわりの快」の問いは、このような文脈の中で問われた問いだったのである。それは、「快とは何か」の問いの一つの結節点と言える。

## II

それでは、ソクラテスは、そしてプラトンは、期待としての快の在り方をどの様に考えようとし、そこに「偽」の成立の可能性のあることを示そうとしたのであろうか。以下それを見てゆかなければならない。

IIの1　ひとは様々に将来のことを思いなし、喜ぶ。ところで、思いなし (doxa) については「そこで思いなされたことが誤っている場合にはその思いなしは誤りである以上、正しくはないのであり、正しく思いなしているのではない。」(三七E一—三) それ故「快はしばしば、正しい思いなしと共にではなくいつわりの思いなしと共に我々の所に生じる」(三七E一〇—一一) ことになる。そこでこのことから「いつわりの快」のあることを示そうとするソクラテスに対してプロタルコスは機先を制してこう言う。「それはその通りです。そして一方思いなしの方は、その様な状況では、いつわりの思いなしと我々と呼んでいます、しかし快それ自身の方はそれをいつわりと呼ぶものは一人としておりますまい。」(三七E一二—三八A二)

いつわりの思いなしとの共在によって期待としての快の偽の可能性を証示しようとするソクラテスに対し、プロタルコスはその事実は偽なる快の存在の証拠にはならないと主張する。問題は、期待としての快において思いなし或いは思いなすこととそこにある快との関係をいかに考えるべきか、であり、この問いは更に、後に述べられる様にもし期待の対象が思いなしを通して与えられるとするならば、正に、期待の対象と期待における快との関係への問いに重なるであろう。

Ⅱの2 プロタルコスの反論を受けたソクラテスはまず思いなしの考察から始める。思いなし (*ôlos*) は記憶と感覚から生じるが、それはひとがある状況で、(例えば) あそこに見えるものは何か、と自分自身に向かって問うて言う。そこで今度は答える者の立場で「あれは人間だ」と、或いは「あれは彫像だ」と答えてまた言う。傍に他の人が居る場合には、自分自身に答えてとして語られたこと。(既にロゴスであるもの) を声にまで拡げて言う。この場合こころは何か紙片 (*βιβλίον* τε) のごときものとされ、真なる或いは偽なる思いなしは、その様な紙片に我々のところのこの中にある書記 (*γραφικαὶ τεύχε*) が書き記したものとされる。思いなしは、この様に、ことば (*λόγος*) として扱えられており、<sup>(7)</sup> しかもそれは紙に書かれた文字の様に、語られたその場で瞬時に消えてしまうことのないものとされている。思いなしの同一性はそこで語られることばの同一性である。二人の人間が同じことを、或いは別のことを思いなししている、といえるのはそれらがことばである場面においてであり、一人の人間の異なる時点での思いなしについて、それらの異同を、或いは整合・不整合を問い得るのもこのことばの場面においてである。

思いなしのこの様な在り方は現在や過去のこととに限定されず将来のことについても同様であり、そしてそれは何よりも将来の快に先立って予め喜んでいる場合にあってはまる。<sup>(8)</sup> 我々は将来に向かって様々なことを思いなし口外されざることばを語り、喜ぶ。期待はまず、思いなしことばとして扱えられている。期待はそれがことばであることによつて、未だ不定で形を持たない将来に一定の形を与える。期待はその一定の事柄への期待として特定される。期待は何かの期待である。その何かは、そのことばの下で形を与えられ、今ここに現前する。しかもこの場合のことばは、言うまでもなく、期待する当の



人自身が語ることばであり、第三者がなす描写のことばではない。<sup>(9)</sup>従って何かを期待している人は、自分が何を期待しているのか、を（尋ねられた場合には）答えることができないしなければならない。

Ⅱの3 無論、将来へ向けて思いなすことⅡことばを語ることがすなわち期待することであるというのではない。今、二人の人間が「明日大金が入る」と語ったとする。その両人は同じ将来のことに関わっているといえる。しかしその場合、一人はそこで喜び、もう一人はそのことに苦を感じおそれるということは充分に考えられる。将来へ向けて何かを思いなすことだけでは期待は成立しない。期待が「快」の一つの部類として考察の対象とされているのはこのことのゆえである。期待は、そこで語られたことへの、それを語った者の関わり方なかで成立するのである。期待は、いま苦の情態にあるものがその欠如の充足を欲求し、しかもその充足の可能性が充分考えられる場合に、その充足による将来の快に先立っていまここで予め喜ぶという文脈の中で語られるものとして、身体的な快とは区別される快の考察の中で登場するものであった。

それでは、そのような「思いなすことにおいて喜ぶこと」が期待することであるのか。少くともプラトンに依れば、それだけでは未だ期待の成立は十分に語り得てはいないとされている様に思われる。プラトンはことばを書き記す書記の他に我々のところに「書記の後をうけて、そこで語られたことの像 (εἰκὼν) をころのうちに描く画描き (εἰκονογράφος) が生じる」(三九B六—七) と言う。そしてその画描きが像を描くということは「人がかつて(『何かを見たり聞いたりした時に』)思いなされ語られたことを視覚やその他の感覚から切り離して、思いなされ語られたことの像を自分自身のうちに何らかの仕方で見ていること」(三九B—C)であり、しかもこのことは先の書記の場合と同様、現在や過去のことに限定されずとりわけ将来のことに関わる場合に見られるとされる。では、期待としての快の考察において書記ばかりではなく画描きをも必要とされていることは何を意味するのであろうか。何故書記だけでは不充分とされたのであろうか。

或る男が遺産を相続し明日大金が入るとする。彼は「明日大金が入りそうだ」と思いなし喜ぶ。翌日になり予想通り大金が入り彼の期待は実現されたとする。しかしこの場合実際に大金が手に入ったことによって、「その期待は実現された」と直

ちに主張することはできない。何故なら、大金が、しかも予想された額と同額の金が入ったとしても、その時彼がそのことに実際に喜ぶのでなければ、昨日の期待が実現された、とは言えない様に思われるからである。期待することの中には、将来実現されたことに喜ぶことへの関係が含まれている。「我々が期待とよんでいるものは、我々の各人において、ログスとしてある。……そしてそれはまた何より画に描かれたものとしての像 (*pa'u'atua*) である。つまり人はしばしば莫大な大金とそれに伴う諸々の快 (いこと) が自分に生じるのを見る。そしてとりわけ描かれた自分が自分ですっかり喜んでいるのを目にする。」(四〇A、傍点筆者)

この様な意味において、期待の対象のログスによる規定(『書記をおくこと』)だけでは期待の構造の解明としては不十分だったのである。すなわち、そこには像を描く画描きが必要だったのである。では、しかし、何故(例えば)「大金が手に入りそれに喜ぶ」こと全体が書記のログスとされなかったのか。それについては少くとも二つの理由が考えられよう。(1)ログスはことばであり語られるものでなければならぬ。しかるに我々は大抵の場合、「何故(何に)喜んでいるのか。」の問いに対して「明日大金が入りそれに喜ぶからだ(喜べそうだから)」とは言わぬ。明日大金が入り「それに喜ぶ」自分の姿を像に描くことは、期待としての快の在り方を問うなかで析出された一つの契機である。(2)先にも語られた様にログスはそれがどこでいかなる人によって語られるか、には無関係にそれ自身の同一性を語り得る場面を持つものとしてある。それに對して像はそこで語られたことに対する、その像を描く人の関わり方が問題になる場面にある。このような理由で書記と画描きの二人が区別して語り出されたのではないかと考えられる。<sup>10)</sup>

Ⅱの4 この様にして、期待としての快は、将来の事柄への思いなし『ログスによって規定されたこと(対象)の実現に喜ぶ自分自身の姿を像として描いて、そこで感じられる快であると規定することができよう。そしてこの場合、ログスが何か将来の事柄の、すなわち、そのログス(『思いなし』)の外にある事柄のログスである様に、像もまた何かの、その像の外にある事柄の、いま現には在らぬがしかし将来在ることの像として、その事柄の実現・非実現によってその真偽を問われ得

るものとして既に(始めから)存している。「それでは一方よき人々には、大抵の場合書き記されたことは、彼等が神に愛されるものであることの故に真であるが、他方悪しき者達には、この場合も大抵、その反対である。……それ故、悪しき人々にとっては、とにかく快が画に描かれて(ἐὐκαρπία ἐν ἑνὶ) 彼等の所にあることにおいては何ら劣っていないけれども、それらの快は何らか偽であることになる。」(四〇B一—七)<sup>III</sup>

### III

IIIの1では、期待におけるいつわりの快の存在は以上の議論によって示されたのであろうか。実は今引用した文章及びそれ以後四〇E一までの箇所はいろいろな解釈を生み、また幾人かの研究者をしてプラトンの議論に何らかの欠陥ありと示唆せしめた部分である。実際、叙述はかなり凝縮され、読み解いてゆくのはかなりの困難が伴う。解釈上の問題は次の点にある。四〇B六—七で「偽である」と語られる快が「画に描かれた(描かれてしまった) ἐὐκαρπία ἐν ἑνὶ」快であるならば、それは将来生じると期待され像として描かれた将来の快であって、その快の生じることを期待していまこで感じている快ではないことになるのではないか。しかるに、前者の快(「快」とする)の偽なることは後者の快(「快」とする)の偽を少くともそれ自身だけでは保証しないのではないか。しかしそもそも偽の可能性が問われていたのは後者の快であって快ではないか。では、果してプラトンはそのズレに気づいていたのか、それともその両者の間を架橋するものを有していたのか、或いは更に、快の偽だけではなく快の偽も然るべき仕方で示されているのか。このような問いをめぐって様々な解釈がなされている。

我々は以下において、これらの問いに答えるべく問題の箇所(四〇A—E)の議論を見てゆかなければならないが、それは単にテキスト解釈の問題にとどまらない。何故ならそれは、IIまでに語られてきた「期待としての快」の構造の解明に正

に関わっているからである。問題は、「期待としての快は、将来の事柄への思いなし」ロゴスによって規定されたことの実現に喜ぶ自分自身を像として描いて、そこで感じられる快である」と規定された時、「描いて、そこで……」という語り方は何を表現しているのか、いかなる関係が未だ明示的にされ描かれたものと、そこで生じるのか、ということである。それは、ロゴスを書き記し像を描くことと、或いは、そこで書き記され描かれたものと、そこで生じる快との間の関係をどう理解するか、の問いであり、従って、その理解の如何が、快の「一性」(A)と「現われ」ある(B)を二本の柱とするピレボス＝プロタルコス流の快把握が快一般に妥当するか否かに直接響いてくる、そのような問いなのである。

さて、最近、ギリシアにおける快の概念について大きな書物を出した Gosling & Taylor は、『ピレボス』篇におけるいつわりの快の問題に一つの付章をあて、期待としての快を次の様に分析する。(彼等の例は、地中海の休日进行期待し、そこで飲み物をのむことを思い描いて喜ぶ、というものである。)

(1) 私が飲み物に喜ぶこと。描かれた快である。私がそれを描く時には未だ生じていないし、また生じることがないかもしれないが、私がそれを期待している場合には、将来生じると信じられている、将来の出来事である。

(2) 私自身が飲み物に喜んでいる像。

(3) 私自身が飲み物に喜んでいるのを私が像に描くこと。(3)は私の精神史の中で、ある一点の時点に生起する出来事(an episode in my mental history)であり、(2)は(3)の対象であり内容をなす。

(4) 私自身が飲み物に喜ぶのを描いて喜ぶこと。(4)は(3)と同様、一つの出来事である。

G. & T. に依れば、真或いは偽が語りつけられ得るのは像である(2)のみであり、(1)、(3)、(4)に関してはそれらが出来事である限り、真偽は問い得ない、とされる。(先程の快は(2)に快は(4)に場面としては対応する。)さてでは、(2)の偽は(4)の偽をいかに保証するか。Gosling の診断によれば(G. & T. もそうであろうが)それは次の二つの前提によって架橋される、という。<sup>(14)</sup>

(a) 快とそこで生じている活動とを同一視する、快に関するプラトンの一般的見解。(この前提は、G. & T. に依れば四〇 C 一—二において見て取ることができる、という。)

(b) 像の内容と像を描くこととの同一視(同じく四〇 B 五—六)

すなわち、偽なるロゴスに基づいて描かれた像もまた偽であるが、この像(の内容)の偽は先ず(b)によってその像の偽なる描きに移行される。(2)↓(3) G. によれば *ῥόγος... ἐξουπαρμένους* は、文字通りには「描かれた快」を意味するがそれはまた「快の像」及び「快を描くこと」をも意味し得る、という。次いで(a)によって、そこでの描きという活動とそこで感じられる快とが同一視されて、描くことにおける快もまた偽なるものとされる。(3)↓(4) かくて、(a)、(b)二つの前提を介して、(2)の偽(快の偽)は(4)の偽(快の偽)にプラトンのなかで移行した、とされる。

G. 及び G. & T. に依れば、(a)はプラトンの快樂論の一般的傾向であり擁護可能なものとされる。(b)については、G. は、像内容の同定条件と像を描くという活動の同定条件の相違を指摘しつつも、考察の場面を黄金の山を思い描いてうつとりするといった場面に限り、更に、この場面では像を描くことよりも像を見ることに重点があること、及び、ここでは像は像を見ている間しか存在しないこと等を主張することによって好意的に理解しようとする。この点 G. & T. はより批判的である。彼等は(b)の同一視は致命的な混同であるとし、プラトンの偽なる快の取り扱いが全体として失敗であると主張する。<sup>15)</sup>

これに対して Dybikowski<sup>16)</sup> は、問題のギリシア語表現は「描かれた快」としてしか解され得ないとした上で、ここでプラトンは「描かれた将来の快」(先の G. & T. の分析の(1)にあたる)と「描くことにおける快」(4)にあたる)とを混同しているとする。ただし、D. はこの混同を容易に生じるものとして好意的に解釈しようとする。(従って D. の理解でも、厳密に言えばプラトンの偽なる快を扱う議論は所期の目的を果さないままに終わっていることになるが、彼はこの議論の哲学的意味を別の所に見ている。この点についてはすぐ後にふれられる。)

Ⅲの2 G. が認め G. & T. が断罪している様に、像と像を描くことは異なる。従ってもしこの混同(= (b))をプラトンの議

論が含まねば、それは少くともある弱さを持つことになる。しかしながら彼等が条件(b)を要請したのは、(i)プラトンの議論がそれとして示したのは快の偽(2)の偽のみであり、従って本来の目的であつた快の偽(4)の偽はそれ自身直接的な仕方では語られてはいないとする事、(ii)そして何より、快とそこで生じている活動との同一視(『a』)をプラトンの快樂論一般の傾向としてそれを『レボス』においても見ようとするからに他ならない。

後の点(ii)に關していま一般的にその當否を語ることができないが次のことは言うことができる様に思われる。第一に、水を飲んで生じる充足が惹き起す快を「水をのむという活動に喜ぶ快」と置きかえることは、「欠如—充足」の枠組の下で生じるとされる快の在り方を見失なわせることになるのではないか。第二に何よりも、G.は期待としての快に於いて「人が喜ぶのは予期(期待)すること(anticipating)であり、将来の事態は予期(期待)することの対象である。」と主張するが、果してそうであらうか。むしろひとは、ロゴスによつて形を与えられた将来の事態(の實現)に喜ぶ自分の姿を像として描き、しかもその描くことに喜ぶのではなく、その像がその像である所の将来の喜び(の實現)に喜ぶのではないか。のどが渴いて苦を感じ水をのむことを欲求し、「あのオアシスまで行けば水がのめる」と期待しそこで快を感じる場合、期待されているのは、(或いは「期待」という語はすでに「快」を含んでいるとすれば)予期されているのは「あのオアシスで水をのみ渴きをいやし快を感じる事」であり、しかもそのように予期しそこで感じられる快(『期待としての快』もまた水をのみ快を感じるという将来の出来事への快として成立するのではないか。期待としての快の対象は(タイプとしては)欲求されたことと同じであり、欲求され予期されたことが實現しそこで快が感じられるが故に「期待する」ということは成立し得るのではないか。そしてこの場合、ロゴス(思いなし)はその期待がめざす対象を先ずもつて規定することによつて期待としての快を可能にするのであり、その前提条件として働くのである。

この様に考えることができるとするならば、活動(描くこと)『快と考える必要はなくそれはむしろここでのプラトンの真意を見失なわせることになるのではないかと思われる。そしてまた、像と像を描くこととの同一視(『b』)をプラトンに

歸しその故にプラトンの議論を批判する必要もなくなると思われる。<sup>(19)</sup>

期待としての快は、いわば初めから、その期待することの外にあるものへと向かっている、すなわち、初めから「在ること」の地平に何らか触れている。そしてそれ故に、将来のある時点にその実現が期待されていることの実現・非実現によって真或いは偽とされ得るのである。(実現しなかった時、その期待としての快は失望に、苦にかわる。)——であれば、期待としての快を、何かを期待して思い描き、その思い描くという活動に喜ぶこととすることは、期待としての快の「在ることへの関わりを覆い隠し、ひいては、真であれ偽であれ、何かを思い描いてそこで快を感じられればよい、とする立場への扉を開くことになリかねない様に思われる。

ともあれ、期待としての快は、(例えば)(あのオアシスまで行けば水がのめそうだ。)と思いなし、将来生ずるであろう快を像に描きその実現にいまここで喜ぶこととして成立するならば、その快は「あのオアシスで水をのむことに関する快」として「水をのむこと」から独立に同定することはできないことになる。それ故、次の点でDは正しい様に思われる。「もし快が対象をとり、しかも、その対象に言及することなしにはその快は特定できないとするならば、信念(思いなし)がその快の対象と根拠とを同定するという役割をはたす以上、その快はその信念(思いなし)から独立ではあり得ない」<sup>(20)</sup>

Ⅲの3 さて、テキスト解釈上問題の箇所四〇A—Eは次のように解されるであろう。その場合の一つのポイントは、議論は四〇C七までで終っており、それ以後C八—E一は要らずもなの要約に過ぎないとこれまで解されてきたと覚しき点である。しかし実は、そこに快とは異なる快の偽を語るものがある様に思われる。具体的に述べていくと、四〇B五—六の *hōvati... eĩōpōpōtē ēvati* は「像に描かれた快」(「快」)としてそれ自体像と解する。従ってC一の偽なる快もまた像に描かれた快である。しかし、劣悪な人々はそのような偽なる快に喜ぶ(*χαίρειν*)と言われる場合の「喜ぶ」は期待としての快(「快」)であり、C四—六の結論で語られる偽なる快も同様に期待としての快である。では快の偽から快の偽へはどう展開されているのか。快の対象を定めるロゴスが偽である状況において、そこで描かれた像としての快(快)もまた偽となる。

それはそこで思い描かれたことが生じない場合である。ところが期待としての快(快)はその将来の快を思い描き、しかもその像にすなわち像として喜ぶのでもなければ、思い描くそのことに喜ぶのでもなく、その像がその像であるそれ(の実現)に喜ぶのであるならば(しかもそのそれは像を介してしか与えられない)、像としての快を偽とするその状況が、正にその期待としての快(快)をも偽とするのではないか。それは将来在ることのないことに関わっている(φ)が故に偽なのである。期待としての快は思いなしが規定するものを対象としてそれに関わる。であれば、その思いなしを偽とする状況(C八—D二)と同じ状況(D七—一〇)にある場合には、その快もまた「偽」と言わざるを得ない様に思われる。思いなしと快との対応(D四)はこのことを意味すると考えられる。(かくて、偽とされる快の身分に関するズレを指摘し(Ⅲの2のイ)そのズレを補正する為に像と像を描くことの同一視(Ⅲの1のb))をプラトンに帰する必要もないことになろう。

Ⅲの4 以上の様に考える時、前にもどって、三二B—Cのソクラテスとプロタルコスの同意——期待としての快がこちら自身に属するものとして、身体的な快とは異なることに關する同意——は、身体的な快とは異なるとされた期待としての快の構造に対するプロタルコスの真の理解を含意してはいない、ということが、ここにいたってようやく明らかになった。その同意は期待としての快が「こちら自身に属する」とされたその限定の故に、それが身体的な快とは異質なものであることに對して与えられたに過ぎない。ではプロタルコスその時の了解はどう解し得るであろうか。それは恐らく、予期すること或いは予期されたもの(対象)と期待としての快との關係についての理解に関わると思われる。「諸々の身体の状態に対する予期のなかで予期されることに則して *κατὰ τὸ τῶν παθημάτων προσδοκίαν*」(三二B九—C一)というソクラテスの規定をプロタルコスは「予期によって *διὰ προσδοκίας*」(C四)と承ける。しかしプロタルコスが用いている前置詞 *διὰ* はその一つの意味として「原因」となるものを表す。つまり、予期することによってそこの快は惹き起こされる、ということを示唆する表現として解し得る。だがそれは正に、身体的な快に於いて、例えば水と、或いは水による充足とそこで生ずる快との關係について語られることではなかったか。こうして、プロタルコスは身体的な快及び期待としての快の両方の快



の在り方を実・際・には同じ図式の下で考えていたのではないか、と推測される。三七E—三八Aにおいてソクラテスが偽なる快の存在を語ろうとして、快が思いなしと共にしばしば生じることを指摘した時にプロタルコスが思いなしにのみ偽の可能性を認めた背景には期待としての快に対するこの様な把握があった（そのような把握を持つ者としてプロタルコスは描かれていた）と考えられる。

しかし、期待としての快は、期待（予期）され喜ばれているもの、或いはそれはいま現には存在しないが故にむしろそれを思いなし更には描くこと、<sup>23</sup>によって惹き起こされるもの、描くことから結果するものではない。何故なら、もしそうであるならば、期待としての快と期待されるもの（将来の快いもの）との関係は偶然的・経験的な関係であることになろう。しかし既に明らかな様に、期待としての快とその対象とは不可分であり、両者の関係はいわば必然的・論理的な関係である様に思われる。もし予期すること（三二C）、思い描くことによって期待としての快が惹き起こされるとするならば、期待して喜んでいる場合、それが何に期待して喜んでいる快であるのか、は推測による他はないであろう。何故なら、快の対象が思いなしによって規定されとするならば、その快がいかなる思いなしによって結果せしめられたかを知ることによってしか、その快がいかなるものに対する快であるかは同定され得ない。しかるにある事柄の原因の同定は推理と観察にもとづくからである。それ故また、自分が何を期待し喜んでいるのかについて誤り得ることになる。

しかし我々は自分が何を期待し何に喜んでいるのか、を推理や観察にもとづくことなしに理解している様に思われる。また、「いつわりの快」が語られる時、それは期待されたことが実現されない場合に偽なる快とよばれるのであって、自分が今何を期待し喜んでいるのかに関する誤りではなかったのである。<sup>24</sup>

Ⅲの5　かくていつわりの快の考察(i)は期待としての快という、こころ自身に属する快をめぐる考察の中で語られ、それが身体的な快と如何に異なるか、を示す試みの中で語られたものであったことが知られる。身体的な快においては、快は何らかの原因によって結果するパトスとしてあった。そこでは、(1)快と（快を惹き起こすが故に）快い（とされる）ものとは

論理的に必然的な関係を持たず、何がその快を惹き起こしたかの如何にかかわらず「快は一つである」とされた。また(2)それは何らかのパトスとして、その都度の「現われ(思われ)」としてあるものとされた。快の一性(A)と「現われ」ある(B)を二つのメルクマールとするピレボス＝プロタルコス流の快の把握は、この様な身体的な快の在り方を一般化したものの、そこに起源を持つものと推測される。それに対して、その様な快とは異なる部類の快としてソクラテスによって導入された期待としての快においては、(1)快はそれが将来のいかなる事態に対するものであるかを必然的に含んでおり、従って快と快いものとの関係はいわば論理的关系である。それ故、その将来の事態への言及抜きに、どのような事態に関わるものであろうと「快は一つである」と語ることとはできないことになる。(2)期待としての快は、その将来の事態の実現・非実現によって真或いは偽とされ得るものであり、たんなる「現われ」に解消され得ないものであった。それはパトスとしての快ではないと言えよう。それは真偽を問い得る場面に何らか在るのである。このように、その構造において身体的な快とは異なるものとしての期待としての快を語り出すことによって、プラトン<sup>25</sup>はピレボス＝プロタルコス流の快の把握が少くとも一般的には妥当しないことを示していると考えられる。期待としての快の存在は、「快の一性」と「現われ」ある<sup>26</sup>を骨子とする彼等の快把握に対する一つの反例となるものであったと言えよう。

おわりに

いつわりの快の考察(i)は、快の一性(A)と「現われ」ある(B)の二点を支柱とする快把握に対して、そのような把握の淵源と考えられる身体的な快とは異なる在り方を持つものとしての期待としての快の在り方——それは将来の出来事の実現への喜びへの期待として、その実現への関係を必然的に含み、しかもその実現の成否によってその真・偽が問われ得る、という在り方——を明らかにすることによって、異議を唱える試みの中で問われた問題であったことが以上の考察から窺い

知ることができよう。

さてしかし、では、プラトンはこれら二つを異なる快としていけば並列的に置いたのであろうか。「現われがある」の構図のなかにあって、それについて真偽を問ひ得ないものと、将来の出来事との関係のなかで真・偽の区別を語り得るものを共に「快」という一つのことが適用されるものとするまでもって、快の考察は足れりとしたと解してよいであらうか。少くとも筆者にはそのように思われぬ。いつわりの快の考察(Ⅱ)、(Ⅲ)においてプラトンは、「現われがある」という所謂身体的な快の在り方を洗い直すことによって「快」の概念を吟味し直している様に思われるからである。だがいまはここで稿を閉じなければならない。

#### 注

- (1) 「ビレボス」一二D—E、一三B参照。(以下、「ビレボス」への言及は頁数のみによる。)
- (2) 但し、それは Gosling, J. C. B., *Plato Philebus*, Oxford, 1975, p. 220 の言う様に期待としての快の虚偽性の三つの様態といった仕方ではない。それはむしろ、最後に「純粹な快」として語られる「真実の快」の在り方の考察をも含めて、「快とは何か」への執拗な問いの連鎖であった様に思われる。
- (3) 四三B七の「今しがた言われたこと」は三一—三二に言及する。
- (4) 三二B—Cでなされる期待としての快の規定は対話人物ソクラテス及びプロタルコスの兩人によって同意されているかに見える。しかし仔細を見ると「情態変化の予期において予期されたことに則して」(*kata to tōv pethatōv prooðoxhna*) (三二B九—C一)というソクラテスの語り方と「予期することによって生じる」(*dia prooðoxias gignōmenou*) (三二C四—五)というプロタルコスの語り方の間にはある微妙な相違がある様に思われる。そしてこの相違は実は、後の「いつわりの快」に対する両者の意見の相違につながる様に思われる。
- (5) それ故、欲求と期待としての快はいわばレベルを異にする。欲求は我々が欲するものとは反対のものの生起の予想と両立可能である。cf. Dybkowski, J.: *False Pleasure and the Philebus*, *Phronesis* XV, 1970, p. 155.

(6) 期待としての快がこころ自身に属するものであることは、それが前提とする欲求が、そこで欲求されるものへと導くものが記憶であることの故に、こころの領域に属するとされたことに依ると考えられる。勿論、その記憶は充足の記憶であろうが、ある特定の出来事の記憶ではない。その出来事を記憶している或いは想い起こすという意味での記憶では、「何かの欲求」の「何か」は与えられない。欲求と関連して語られている記憶は、例えばあるもの（水等）をのめば充足が生じ快が生じることの、いわばタイプとしての記憶であろう。渴いている時にその充足へ向かう一種の動きとしての欲求は、この様な記憶によってその向かう先を与えられ、可能となる。しかし、それに対して、期待は基本的にはある特定の出来事、その実現・非実現が直接問われ得る事への期待であって、そこで期待されるものは、単にタイプとしての出来事としての欲求されるものとはいわばレベルを異にする。欲求してはいるが期待が持てず失望するということが可能であるのはこのことに依ると思われる。

であれば、期待としての快がこころの領域に属することを、欲求を可能にするものとしての記憶がこころに属することによって示そうとする議論は少くとも不十分であり、期待としての快の構造をそれとして語っているとは言えないことになる、と考えられる。

そして、この不充分さは、今予見的に語ることを許されるとすれば、より具体的には、何かを期待すること、或いは「期待する」という表現が既に「喜ぶ」ということを含意するならば、予期することとそこで快が感じられることとの関係について、前者が後者を原因として惹き起こすと考え、またそこで感じられる快は一種のパトスとして「現われ」ある」という在り方をする、と考える可能性、従ってその構造において、期待としての快を身体的な快と同じ様に考える可能性を開いたままに残している点にある、と言えるかもしれない。そしてその場合には恐らく期待としての快に「偽」を語ることも無意味なこととなろう。

(7) cf. Theaetetus 206 D, Sophistes 263 E.

(8) 「我々はまた、一生を通じて期待で一杯である。」(三九E五—六)

(9) 但し、そこで語られたことばの内容（期待の対象を規定する）として一人称が何らかの仕方で登場する必要はない。例えば親は子供が試験に合格することを期待することができる。期待する者自身の活動・振舞いだけが期待され喜ばれるわけではない。しかし子供の合格を期待する旨を語ることばは、期待するその当の親自身が語ることばである。

(10) cf. 32 C, 39 D; 'the pleasure of anticipation consists in the anticipation of pleasure', Williams, B. A. O., "Pleasure

and Belief," in *Philosophy of Mind*, ed. S. Hampshire, 1966, p. 238.

- (11) この場合、書記が画描きに先行する。何故なら、対象が決まらないままに、ただ喜んでいる自分の姿を描くことなど不可能である。

- (12) Gosling, J. C. B. and Taylor, C. C. W., *The Greeks on Pleasure*, Oxford, 1982. (以下G.&T.と略) Appendix A, p. 436 ff.  
(13) 「場面として」 という限定の意味は後に明らかにしよう。

- (14) Gosling, op. cit. pp. 214~219. (以下G.と略)

- (15) G. & T., p. 438, p. 452.

- (16) Dybikowski, op. cit., pp. 164~165. (以下D.と略)

- (18) G., p. 216.

- (19) 従ってまた「プラトン」を「を喜ぶ」が所謂 propositional attitude であることに気づいた最初の哲学者であると主張する Penner ("False Anticipatory Pleasures: Philebus 36a3~41a6," *Phronesis* XV, 1970, pp. 166~178.) に対するG.&T.の批判(p. 441)は、その効力の一半を失なう様に思われる。その批判は「enjoy X-ing」と「being pleased that p」との区別をしている様には思えない、ということにその基礎を持つものであった。しかし実は初めから「enjoy X-ing」の分析ではなかったのではないか。

G.やG.&T.が主張する様に「ピレボス」以前の対話篇において、活動とそこでの快とを同一視する立場をプラトンがとったか否かについては、ここでは問題にできないが、少くとも、彼等の言う「enjoy X-ing」なる図式の意味はそれ程明らかとは言えない様に思われる。「活動 activity」という語は一見アリストテレスの快楽論を想像させるが、恐らくそうではないであろう。のどがかわいて水をのんで快を感じる場合、「水をのむ」という活動が果してアリストテレスのいう *ἐνέργεια* といえるかどうかには問題があるのではないか。実際G.&T.はアリストテレスの快楽論を扱う章では「*ἐνέργεια*」の訳語として activity の他に actualisation の語を用いている様である。

(因に「enjoy」という動詞がいわば哲学的文法として「that」clauseを取り得ることに關してはAnscombe, G. E. M., "On the Grammar of 'Enjoy'," in her *Collected Philosophical Papers*, vol. II, pp. 94~100 を参照)

(20) D. p. 162; also cf. Penner, p. 169.

快の信念への依存関係は将来に関わる快に限られない。いま私が一枚の絵を見て喜んでいる場合、その快は、ある信念例えば「それはラファエロの絵だ。」という信念に依存していることがある。この点に関しては、Williams の論文を参照。また、快が信念に依拠する以上、その対象規定に関しては、「外延性の原理」が無条件には適用できないこと、そしてこのことは、名及び相当句ばかりではなく「全ての」といった論理定項についてもあてはまり得る、といったことについては、前注の Anscombe の論文を参照。

(21) この点に気づいていたのは Penner である。彼の論文の一七六—一七七頁の注(7)を参照。

(22) 四〇C八—D一〇はC四の  $\delta\gamma$  を説明するものであったと解したい。

(23) non entium non sunt effectus.

(24) 期待における何らかの苦〓欠如の存在に着目し、期待の対象を、それが実現した時にその欠如を充たすもの、という仕方で規定しようとしても事情は同様であろう。

(25) 実際「ビレボス」一二—一三で「快はそれがいかなるものからであろうと、快であるという点では一つである」とされた場合の「から(ἐκ)」が、快がそこから結果するところのものを示す表現であると解し得るならば、そこでのプロタルコスの快理解には、その様な構造とは別の在り方をする「期待としての快」は含まれてはいなかったと推測することもできよう。

(26) 「現われ〓ある」という在り方、「快いと思われれば、実際快くある」という在り方をするものが快だ、という了解は、我々の快の理解に執拗につきまとう。期待としての快の場面でも、それは(例えば)「真であれ偽であれ(真となるにせよ偽となるにせよ)、いまここで何かを思い描き快いと思われれば、それで快を感じているのではないか」という仕方であらう。それは、期待されたことが実現されなくともその思い描いた時に感じられた快が実は快ではなかったということにはならず、従って、ここでもなお「快は快である」といえるのではないか、とする把握である。そしてそれは結局「夢であれ現であれ、或いは狂気乱心の場面でも、喜んでいると思われ、が、実は喜んでいるのでは決つてない」という様なものは誰もいない。(三六E五—七)とすることにつながるものであらう。しかし、少くとも期待の場合、右の「真であれ偽であれ……」ということは、何かを思い描きその何かに喜ぶことという期待としての快の在り方を、「思い描くことによって惹きおこされた快」という何か身体的な、パトスとしての快

に似たものとすることであり、それは異なる在り方をするものの間の混同である、と言うことはできよう。それは「期待としての快」ではない。成程ソクラテスによって「快を感じている者は、正しい仕方にせよそうでないにせよ、とにかく本当に快を感じていることを失なうことは決してない」と語られてはいる。(三七B二—三、B七、四〇D七—一〇)しかしそれは期待としての快が本来持つ構造の中にあることとして語られているのであり、「真でも偽でも快は快」とする把握はそれからある微妙でしかも何か決定的な仕方デフォルメされている。それは「在る」とのつながりを初めから断ち、それによって(思い描くことにおいて語られる)ロゴスをも何か私秘的なものに変容させる。そこには真偽の区別は真実の所存してはいない。

とはいえ、それでも猶、「現われⅡある」という在り方をするものという快把握は、執拗に我々に迫ってくる。それは一つには、身体的な快と呼ばれているものの在り方に引きつられるからでもあらうか。いつわりの快の考察(Ⅱ)、(Ⅲ)はこの点をめぐってある様に思われる。

(本学文学部助手・哲学)